

09 08 07 06 05 04 03 02 01 ■

お 幕 さ す し 幕 お ぶ ゆ 幕 く ふ
ふ 間 わ は た 間 っ ら あ 間 ち れ
ろ 03 り だ ぎ 02 ぱ じゃ 01 づ あ
こ か す が ー け い
 た

| | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|---|
| | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| | 120 | | 96 | | 77 | | 52 | | 29 | | 5 |
| 129 | | 107 | | 84 | | 65 | | 38 | | 17 | |

20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10

さ さ や き
く っ つ け な が ら
く っ つ け あ う
幕 間 06
幕 間 05
し ょ じ ょ ま く
ゆ び で い っ し ょ に
ゆ び そ う に ゆ う
し っ く す な い ん
お と ま り
ば ー す で ー
幕 間 04
く ち で え っ ち
ゆ び で え っ ち

300 284 271 262 254 237 223 211 200 188 175 168 154 141

今日は梅雨の晴れ間。すでに真夏のような日差しだけど、室内に差すのはほのかな陽光。二十八度に設定されたエアコンのおかげで心地良い。十畳ほどの室内には、スタインウェイ・モデルLのグランドピアノが二台。艶消し黒のシックな風合い、ところどころ鋭角的な外装が男らしさを感じさせる。

その一台を弾くのが十七歳の少女、若宮翡翠。

まったく世代ではないはずの昭和アイドルの楽曲をピアノアレンジしている。楽譜も見ずに弾いているので慣れているのだろう。

軽やかな指先の動き、セミロングのまっすぐな髪が揺れる様が見目麗しい。

そんな翡翠の演奏を、近くのソファに座って眺めているのが同級生の

片瀬碧。

まるで本物のアイドルが目の前にいるかのように目を輝かせ、わあ、とはしゃぎたくなるのを我慢している仕草が愛らしい。

そして演奏が終わると、我慢しきれなくなった碧が感動を爆発させた。

「凄い！　凄いね翡翠ちゃん！　上手だよ！」

「そ、そんなに褒められるほどでもないわ？　今だって何カ所も間違えて……」

満更でもない、と微笑む翡翠。

碧はさらに笑顔を明るくする。

「それでも上手だよ。この曲好きだから、思わず歌いそうになっちゃった」

「ふふっ、じゃあもう一回弾くから、歌う？」

「え!?　う、嘘嘘っ。歌えないよっ」

「いいじゃない。カラオケだと思って」

■ 幕間
01

「えっ……」

日が落ちかけ、照明も点いていない薄暗い教室に、碧の声が響いた。

「……え、って。なあに？ まさか冗談だったの？」

「ううんっ、違っ……本気。本気！」

「そう。良かった。それじゃ、明日から……いいえ？ 今から、よろし

くね？ 片瀬さん……碧ちゃん」

「若宮さん……」

「名前で呼んで？」

「そ、そうだよね！ えっと、あの、えー……と。ひ、ひすっ……え？」

胸の高鳴りがうるさくて、口の中がカラカラで、思考がまとまらず混乱しすぎて、碧はその場にしゃがみ込んだ。

その姿をしばし見下ろした後、翡翠も同じくしゃがみ込む。

「大丈夫？」

「大丈夫……じゃ、ないかも」

「もう保健室は閉まってると思うけど。どうする？」

「どうも、こうも——ッ！」

バツと顔を上げると、目の前に翡翠の端正な顔があった。碧は目を大きく見開いたまま動けなくなる。

耳が熱い。息が荒い。膝が震えて立ち上がれそうにない。

「もう一度、言うけど……あたっ、あたしが言ってるのは、友だちとしてって言う意味じゃなくて」

「恋愛としてでしょう？ 私も同じ気持ちだから、嬉しいわ」
「ヒュ」

息を呑む際、おかしな音が鳴ってビツクリする碧。
慌てて顔を伏せて、しかしまたすぐに顔を上げる。

碧のクンニで絶頂した翡翠。

幸福すぎる官能に身を委ね、意識を飛ばしそうになる。しかし碧に乗っかっていることを思い出して、すぐに体を立ち上がらせる。

膝に力を入れ、腰に力を入れる。甘い痺れが下腹部に滲むが、それを堪能している場合ではない。

なんとか腰を持ち上げ、そして仰向けに寝ている碧の横に、頭を揃えて倒れ込んだ。

「はあゝゝ」

脱力すると、ずしっと体が重くなる。満足感のある疲れだけれど、そのまま寝入ってしまうわけにはいかない。

翡翠は重い体を持ち上げて、荒く息をする碧にキスをした。

「あはは、変な感じ」

先ほどまで陰唇とキスをしていたから。

翡翠も、フツツと笑って、また碧の隣に寝転んだ。

そのまましばし、息を整える。お互いの腕が当たったので、そのまま手を握り合った。

指を絡める恋人繋ぎ。碧は、翡翠の指が少しべたついてたのが自分の愛液のせいだと気付いて恥ずかしくなる。

「い、一緒にオマンコにキスするの、エッチすぎたよ……」

「シックスナインって言うの。ホント、卑猥だわ」

「シックスナイン？ あゝ。六十九ね。うんうん、なるほど……こういう言葉って、誰が考えるんだろうね」

「さあ？ エロい人じゃない？」

「偉い人じゃなくて？ あはは」

世の中には自分たちよりもエロい人がいるものだ、と感心する碧。そ